

<2010参院選>何を選ぶのか：中 政治とカネ、本気の党は（朝日新聞）

2010.07.08 東京朝刊 3頁 3総合（全1,931字）

有権者が、もううんざりしているからなのか。民主党の争点隠しが巧みなのか。参院選で「政治とカネ」が目立たない。おかしい。この選挙は不透明な政治資金を断ち切る「出直し」の節目のはずだ。

「母からの資金提供はまったく知らなかった」

鳩山由紀夫前首相は遊説先でも、こう弁明している。だが、いま語るべきは母親からのカネを何に使ったのかという事件の真相だ。

現職衆院議員ら3人の元秘書が起訴された小沢一郎前民主党幹事長も、事件にはだんまりを続けている。

2人とも役職を降りたのだから、もういいだろうと言わんばかりだ。こんな政治家の態度が、いつまでまかり通るのか。「政治とカネ」は事件と法改正の「いたちごっこ」だ。改革の歩みはあまりにのろい。この参院選で、一步前へ進めなければならない。

かつて、55年体制下では政治の金権体質は今より大目に見られた。腐敗の温床の自民党が冷戦構造での体制維持の役割を担っていたからだ。

「公共事業でどんどん口をきいて、出来高払いで平均2%の口銭が入ってくる」

田中角栄元首相の秘書は堂々とかう書き残したほどだ。

■「合法的な横領」

1980年代には、土地転がしや株売買もする「ミニ角栄」が全国にいた。道路、港湾、ダムといった公共事業を受注したければ、彼らに献金し、発注者に声をかけてもらうのが当たり前だった。片山善博・慶応大教授の表現を借りれば、「合法的な公金横領がまかり通っていた」。

そのころは、政治家が受けた献金の収支報告の義務づけや、閣僚の資産公開を始めるのが、やっとだった。

88年に発覚したリクルート事件が第1の転機になる。首相経験者らの錬金術に、世論の堪忍袋の緒が切れた。第2の転機は89年の冷戦終結だ。自民党が反共の旗印を失い、腐敗を許容されなくなった。

政治改革の時代が幕を開ける。94年には衆院への小選挙区比例代表並立制導入と、政党交付金という年間300億円余の税金投入が決まる。続いて政治家個人への企業・団体献金も禁じられた。その結果、自民党では党本部に財源と権限が集中し、派閥政治が溶けていった。資金力がものをいった党内力学も変質し、「選挙の顔」に乗る勝ち馬志向へとなだれを打った。

政治のあり方も、選挙のやり方も激変するなか、根っこにあるカネ集めの手法だけは変わらなかった。自民党が企業献金をもらえる党支部を7千以上もつくり、議員がそれを財布代わりに使ったのが典型例だ。04年の旧

橋本派のヤミ献金事件では、15億円もの裏金が明るみに出た。

■国民の目は変化

国会議員の旧態依然ぶりとは対照的に、有権者の目は確実に厳しくなっていく。「コーヒー1杯ぶん」といわれた250円の税金を、国民が毎年出す制度が定着したことが大きい。ヤミ献金などの「入り」に集まっていた視線が、使い方にも向き始めた。「なんとか還元水」などの事務所費問題はその一例だ。

そして「政治とカネ」を起点とした政治改革は、20年余の時を経て昨年の政権交代を実現させた。そんななかで起きた鳩山、小沢両氏の事件は時代の変化に背を向け、改革の道のりをあざ笑うかのような異物に見える。

膨らむ税収を政官業で回してカネを生むような政治の作法は構造的にもう無理だ。いまどきの「事業仕分け」に象徴される政治スタイルにふさわしい、資金集めと使い方に進化する必要がある。そのキーワードは「個人献金」だ。

08年の米国大統領選で、オバマ陣営は草の根の100ドル以下の個人献金を広く集め、総額は6億ドルを超した。

■少ない個人献金

一方で、日本の政党には個人献金が圧倒的に少ない。08年分の政治資金収支報告書を見ると、民主党本部の収入の約84%、自民党でも50%以上が政党交付金というありさまだ。「官から民へ」といわれるご時世に、民主党はまるで官製政党だ。

個人献金を増やすための具体策は、はっきりしている。カネの流れを透明化して、政治が信頼を得ることだ。政治資金規正法の改正案も既に論じ尽くされている。

たとえば、企業・団体献金の廃止をめざしつつ、党支部での受け取りは即刻禁止する。現金での授受を全面排除し、すべて指定口座を通す。報告書を電子化する。連座制をさらに強化する、など。法改正しても、抜け道探しは続くだろう。だが、策があるのに手をつけないのは、やりたくないからでしかない。

各党は公約している。「国会議員関係の政治団体の収支報告書の連結、総務省への一元的提出」（民主）、「透明性を一層確保」（自民）。公明、社民、みんなの党や、政党交付金を受け取らない共産党は「企業・団体献金の禁止」を明言している。

どれが本物で、どれが口先か。政治の世界では、だまされる方も悪いと肝に銘じながら、見極めよう。（編集委員・坪井ゆづる）